

敷田稔チェアマンの思い出

2018年5月16日 ウィーンにて

アジア刑政財団

理事兼事務局長 山下 輝年

アジア刑政財団（ACPF）の偉大な敷田稔チェアマンを偲ぶ記念行事の開催に当たり、皆様が御参集くださり、誠にありがとうございます。

特に千田恵介 UNAFEI 所長、エドゥアルド・ベテレ氏、国連薬物犯罪事務所（UNODC）の皆様の献身的なご協力により開催できたわけでありまして、ACPF として心から感謝申し上げます。

初めに、私にとり最も印象的な敷田先生の言葉をご紹介します。それは国際協力三原則ともいうべき「汗出せ、知恵出せ、お金出せ」です。

言うまでもなく、「汗出せ」は、まずは自分で率先して動けという意味です。無から有は生じない、絶対に。

仮に身体的理由その他の理由で動けない場合でも、困難を乗り越えるアイデア、これまでと異なる対処方法を提案する。これが二つ目の「知恵出せ」です。

その知恵がどんなに素晴らしくても、資金無しには何もできない。これが三つ目の「金出せ」です。この三つ目はブレイス・パスカルの名言「力なき正義は無効」を彷彿とさせるものです。敷田先生は、理想主義者であると同時に現実主義者だったのです。

敷田理事長と初めて会ったのは UNAFEI 教官になった 1995 年でした。そこで学んだことに次のことがあります。国際協力と言え、今でこそ政府開発援助を扱う JICA が有名ですが、JICA 創設は 1974 年です。ところが UNAFEI はその 10 年以上前の 1962 年から刑事司法分野における国際協力を法務省予算で実施していました。

その後に UNAFEI 研修・セミナーは、JICA の国際協力プログラムの一つとなって現在に至っているのです。千田所長が述べたように国連と日本政府の協定改定に関する敷田先生の功績に加え、JICA 予算で行うようになったこともまた UNAFEI の現在に繋がっており、国際協力三原則の実例でもあります。

さらに、敷田先生は、ACPF 理事長 1 年目に中国刑事司法機関を対象とする特定国（二国間）研修を UNAFEI に提案しました。その年は ACPF 予算で実施したのですが、それまでの UNAFEI は多数国間研修しか実施していなかったのです。そして翌年からは JICA と交渉し説得した上で協力を取り付けて JICA プ

プログラムの一つとして実現し、この特定国研修は対象国を変えながら現在も続いています。

敷田先生は国連、国際協力に関係する運命にあったといえます。なぜなら、検事になったのは1956年4月ですが、その年の12月18日に日本が国連加盟を許されているからです。ちなみに、個人的なことを言えば、私の誕生日は国連加盟の3日後です。

また、敷田先生は、UNAFEIの教官・次長・所長の全てを経験した初の検事です。しかも、国内の事件を中心として扱う検察庁勤務となっても、積極的に国際協力に関与しました。

ACPF理事長時代には、1992年から2008年までの間に、12回ものACPF世界大会をアジア・太平洋諸国で開催しています。

敷田先生は誰よりも来る2020年京都コンGRESを見届けたかったに違いありません。現在のACPFは世界大会のようなものを開催できません。それは財政や人材の問題もありますが、最大の理由は「敷田先生がいない」ということに尽きると思います。

しかし、今の我々にできることは、来る京都コンGRESを成功に導くことであり、それが敷田先生の慰霊になり、大恩に報いる唯一の方法だと思います。

では、偉大なるチェアマン敷田先生の生前の功績と笑顔をスライドショーでご覧下さい。

以上